

《かちやん》

(物を置く音)

ノラ

「ふはっ！！

はー……うまかつたあ……はふうー♪」

食事が終わり、幸せそうに吐息を漏らす少女。

そんな彼女の様子を見ながら、そろそろいいかと、

【なんでスリなんかをしたんだ?】

と問う、貴方。

ノラ

「む……ふんつ。

別に、金が欲しかっただけだよ……おっさんには関係ねえだろ！」

言われて立場を思い出したのか、気まずげに顔を逸らす少女。

【スラれた立場で言える事じやないが、明らかにスリ慣れてなかっだし、スラムの子供ならもつと小ずるくやる。仲間もいないようだし、初めてだつたんじゃないのか？

……何か訳ありか?】

と、貴方が問うと、少女は余計に口をきゅつと引き締め、何も喋るまいと黙りこむ。

そのまま言葉を待っていると……。

ノラ

「おつさんには、関係ないだろ……。

飯をくれた事には感謝してやるけど、そんな事言う、義理はねえよ  
……」

と吐き捨てるよう言い、また何の反応も示さなくなってしまう。  
貴方はその様子に再び大きなため息をつき、

【……まあ、確かに自分には関係のない事だ。

お前があんまりに弱ってるから、つい余計なおせつかい焼いただけだ  
な……。ほれ！】

と、彼女から言葉を引き出す事を諦め、胸元から小さな皮袋を取り出  
と、彼女に向けて放り投げる。

そして、それ以上は彼女の事を気にしないように、そのまま冒険の準備  
を始める。

『ひゅっ、ちやりん』

（放る音、中の小銭が鳴る音）

ノラ

「え……これ、何だよ？

何か変なものでも……って、金！？

お、おつさん！？ ど、どういうつもりだよ！」

【それぐらいあれば、数日食うのには困らないだろう。スリは止めて、気が済んだら家に帰るんだな。

鍵は置いておくから、気が済んだら出て行け。外に出たら、鍵は宿の主人に渡してくれればそれでいい】

と、そう言つて、座り込んだままの少女を置いて外へ向かつて歩き出す貴方。

『ガチャ』

(扉の開く音)

ノラ

「は？　え……何言つてんだ、おっさん？

おい、ちょ……待てよ！？

なんでオレにこんなにしてくれる？　つて、おい！？　話聞けつて！？』

『ガチャーン……カツカツカツ』

(※扉を閉め、そのまま歩いていってしまう音)

少女の叫びを無視し、そのまま扉を閉め貴方は外へと出て行つてしまふ。

どうせ冒険で持ち帰ったマジックアイテムなど、価値のあるものは一箇所に纏め、そこだけは念入りに保管してあるのだ。

少女の様子から、鍵開けなどの高度な技術を持っている様子もなし、生活空間でしかないこの部屋の物ならば何か盗まれた所で困りはしない。

そのぐらいなら、欲しいものがあれば勝手に持つていけばいい、と貴方は思い。

それに不思議と、この少女ならばそう悪い事はすまいと、そう思えてしまった貴方は、

これで気まぐれに少女を拾つてきてしまった義理は果たしたと、もう振り返る事もなく自らの仕事……今日の冒険へと繰り出すのであった。

――――――

『カツカツカツ……ガチャ』

(歩いて帰つてくる音)

今日は大した依頼もなく、近場に湧いた数匹のモンスターを退治し終えた貴方は、珍しく遊ぶ氣にもなれずに、そのまま家に帰つてきいていた。念のため宿の主人に聞いてみたが、鍵など預かっていないという言われたために、自分の勘も鈍くなつたもんだ、と自嘲するような気持ちを抱きながら、部屋の扉を開け……瞬間、呆然と立ちすくんだ。

そこは間違いなく貴方の部屋であつたが、仕事の忙しさにかまけて、乱雑に物置のようになつていたはずの部屋が、簡単にであつたが整理をされ、はつきりと生活するための空間と分かるように整えられた。まさか部屋を間違えてしまったのかと見渡すと、確かに自分で買ったが

何処かになくしてしまったはずの家具なども見つけ、ここが間違いないなく自らの部屋なのだと理解してしまう。

貴方が訳が分からず呆然としていると、コトコトという久しく自分では使つていなかつた台所から、何かを煮る音と共に、食欲を誘う香りがふわりと漂い鼻孔をくすぐつていく。

ノラ

「あっ！ ようやく帰つたのかよ、おっさん！

つたく、作つた飯が無駄になるかと思つたじやねえか！

……ま、食つてくるかもと思つて、朝飯にも出来るようスープにしてたんだけどよ」

『カラカラカラ……』

（鍋をかき回す音）

声の向きに視線を移せば、台所の前でやはり貴方の部屋から掘り出したのであろう。

買ったままこれまた何処かに消えてしまつていたはずの鍋を搔き回している、今朝別れを告げたはずの少女の姿を見つけてしまう。

【……なんんでいるんだ？】

と、てつきり、もう帰つたとばかり……それこそ幾つかの荷物と共に、朝渡した金と共に消えているだろうと思っていた少女がそこにいる。

何度も修羅場を潜つて（くぐつて）きたはずの冒険者としては情けないものだが、想像もしていなかつたために、貴方は思わずぽかんと大きく口を開けて、尋ねてしまう。

ノラ

「え？ ん、あー……。

あ、あは♪ えっと、飯はもう食つてきたのかよ？  
まだ食えるつてんなら、丁度出来てるし食うか？」

少女は貴方の問いに一瞬言いよどんだが、聞こえなかつたかのように振る舞い、明るく声を掛けてくる。

未だに、驚きに軽い混乱を覚えてしまつてゐる貴方ではあつたが、荷物を置いてから外食でもするかと思っていた貴方の空腹の胃が、料理の香りに刺激され、ぐううう……と小さく音を立てる。

不審や抵抗を覚えなかつたといえ巴噺になるが、よほど特殊な毒でない限り注意すれば問題ない……そう思い、貴方はいぶかしみながらも空腹の促すままに首を縦に振つた。

ノラ

「んつ、そつか♪ んじや用意するから、家主はテーブルに着いてなつて！」

まあ、朝貰つた金で少し買つてきたもんで作つただけだから、そう大したものんじやねえけど……体が暖まるのだけは保障してやるからよ！」

返答に気を良くしたらしい少女は、少しだけ楽しそうに笑い、貴方をテーブルへと誘う。

躊躇いがちに貴方が席に着くと、その前にやはり貴方の私物の……無くしてしまつたはずの食器とそれに盛られた、朝の残りのパンやチーズ。そこにトマトをベースにした野菜とこれまた朝の残りのハムを切つて入れたらしいスープが置かれていく。

ノラ

「買い置きの食い物以外なんもねえからよ、どうしようかと思つたけど。

外で塩と少し野菜買つてきたんだ。おっさんの味覚に合うかは知らねーけど、まあオレなりに食えるもんにはしたつもりだよ。

ん、ほら！ 食おうぜ？ スプーン取りなつて！

うん、よし……じや、いただきます！

んぐつ、んつ……ずづつ……はむつ、んぐんぐ……ぐくつ。

んんう、まあまあイケてる味になつてんじやねえかな♪ はむつ！」

状況に置いてきぼりにされてしまつているような気持ちから、手を動かせざいる貴方を気にした様子もなく、上品という程ではないが、今朝食べていた獣のような食べ方よりは幾分かマシな様子で少女は食事を始める。

ノラ

「んつ、むぐむぐ……んん？ んんう、おっさん食わないのか？」

外まだ寒いし、スープは暖かい内に食うもんだぜ？」

【ああ……うん、いただきます】

と、もはやどちらが家主なのか分からぬ感じで、少女に促され貴方はスープに口をつける。

トマトの酸味と、野菜が出たのだろう仄かな甘み。  
そしてハムの塩味と油が溶けこんだ、素朴ながら温まる味が冷えた体にじんわりと染み渡る。

ノラ

「……どうだよ、食える味か？

おっさんが、美食家気取つてたりしてなけりや平氣だとは思うんだけど  
……大丈夫だよな？  
……ど、どうよ？」

【ああ……うん、大丈夫だ。うまい】

と、貴方は素直に少女に返事を返す。

食べてみた所、特に怪しい味もなく。それはただ純粹に食事として美味かつた。

ノラ

「ん、そか……へへ、なら良かつた！」

貴方の返事に少女は少しだけ自慢気に、そして嬉しそうに笑い、食事を

続ける。

まだ戸惑いながらも貴方も彼女に続くよう、食事を続ける。

朝とは違い、何故か立場の変わってしまったような奇妙な沈黙の中。不思議と不快にならない、かちやりかちやりという食器の音が、暫し貴方の部屋の中に響くのであった。

《かちや……かちや……》

(食事の音)